入 学 試 験

問 題

国

話

一、この問題の試験時間は六十分間です。

弋 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。

(問題文には、出題の必要に応じて変更を加えた部分があります。)

六、その他、監督者の指示に従ってください。

五、この問題冊子は回収するので、持ち帰らないでください。

終了の合図で、すぐ筆記用具を置いて答えの記入をやめてください。

印刷がはっきりしない場合のほかは、問題についての質問は受けません。

問題と解答は、声を出して読んではいけません。

四、 三、

みずからの行為を選ぶ主体である(=主体性を発揮する)とともに、社会・文化的に育まれる(=社会化される)。 らわれるようになるのだ。このように、社会のなかでさまざまなことを考えたり感じたりする主体を「自己」と呼ぶ。自己は は少なくないだろう。こうした悩みをもつことは、青年の特権である。そもそも生まれたときには、そんな問いを発する 「私」が存在しているかどうかさえあやしい。それがいつしかはっきりとしたかたちをとりはじめ、ついにはこんな悩みにと 「本当の私は何をしたいのだろう?」。大学入試や就職活動に直面してこんな問いに悩まされている人、かつて悩まされた人

念に観察すると、自己が現れる前に、自己と他者がはっきりと分化していない状態が先行していることがわかる。子どもの発 自己の成り立ちについての議論を切り拓いたのは子どもの発達研究である。赤ちゃんとその周囲の人びととのかかわりを丹

が優勢である。生後二か月ごろになると、養育者(たとえば母親)をはじめとする周囲の人びとと視線や音楽的な発声をつう たりすることができるようになる。これは「第二次間主観性」と呼ばれ、子どもが文化的に蓄積されてきた言語をはじめとす という発話で、赤ちゃんが持っている物を要求していることを理解し、要求に応じてその物を渡したり、 じて交流するようになる。こうして達成される渾然一体とした関係性を、「第一次間主観性」と呼ぶ。さらに生後九か月をこ る知識を獲得する基礎だとされる [Trevarthen 1990]。 えると、他者の意図を理解し、それに応答したり、それを再現したりすることができるようになる。たとえば、「ちょうだい」 間主観性のあり方は、子どもの発達にともなって変化していく。赤ちゃんは、生まれてしばらくは反射などの生理的な反応 みずから要求を行っ

徴づけているパーソナリティがどのように構成されていくのかを明らかにしようとした研究は多い。日本文化を他者との関係 議論を相対化してきた。とくに、 子どもを対象とした人類学は、さまざまな経験的事例にもとづいて、こうした西欧で主流をなす自己の成り立ちについての 西欧以外における自己の成り立ちや社会化のプロセスを論じることによって、 ある文化を特

する政策は、枚挙にいとまがない。またテレビのバラエティショーでは、しばしば日本や他の国の文化の特徴がおもしろおか チは「文化とパーソナリティ論」と呼ばれ、当初は人類学者の専門用語にすぎなかった「文化」ということばを一般に広める のきわめて特殊な状況で書かれたにもかかわらず、その後の日本文化の研究に強力なインパクトを与えた。こうしたアプロ やその意見を重視する「恥の文化」と位置づけ、内的な良心の形成を重視する西欧の「罪の文化」と対置したルース・ベネデ も大きな働きをしている。日本でも、正しい日本文化を伝えることをうたった教育プログラムや日本文化の魅力を活かそうと しくとりあげられ、そうした文化観にあわない言動を発した有名人が非難される姿もしばしば目にする。 ことに大きく寄与した。現在では、文化ということばはじつにさまざまな社会的文脈で用いられ、教育・政治・経済において 『菊と刀』(原著初版一九四六年)は、そのなかでももっとも優れたものの一つである。この本は、 第二次世界大戦下

その好例として、入念なフィールドワークにもとづいてペルーのマシゲンカ、南太平洋のサモア、米国ロサンゼルス(LA) の中産階級における社会化について論じた研究を挙げよう [Ochs & Izquierdo 2009]。 じっさい近年の人類学的な研究は、こうした特徴づけが理論的にはあいまいで、民族誌的には単純すぎることを示している。 だがこうした文化的な特徴づけの広まりは、もともとは分析概念だった「文化」の切れ味を鈍らせてしまうおそれがある。

非西欧では他者との協調を重んじる相互依存的自己観が共有されているといわれる [Markus & Kitayama 1991, 2010]。 し の家族のみにおいて、相互独立性を高めるための価値と家庭における実践との矛盾が、はっきりとことばに出して語られてい とによって相互依存性を高めるいっぽうで、子どもは生業や家事の手伝いといった身の回りの実践では自律的にふるまえるよ 長することを余儀なくされている。逆に、マシゲンカやサモアの家族とコミュニティは、お互いに助けあうことを重視するこ うに社会化される。こうした報告が示すように、相互独立性と相互依存性は両立可能である。ただし、 された子どもの宿題を長時間手伝ったり、子どもの安全に配慮して毎日学校への送り迎えをしたりして、子どもの依存性を助 Aの親に聞いてみると、たしかに子どもの独立性を理想としていることがわかる。ただし日常的には、親は厳しい競争にさら しばしば、LAを含む西欧ではまわりと切り離された相互独立的自己観が重視されるのに対して、東アジアをはじめとする これらの 事例ではLA

される環境にさらされて育つというジレンマに直面している。 る。その結果、LAの子どもは「依存性のジレンマ」[Whiting 1978]、つまり子どもが独立性と他者への依存性の双方が強調

えることだろう。 に代表されるような文化的なステレオタイプを生産あるいは再生産することではなく、フィールドの知によってそれを乗り越 このように、文化的実践においては、時にその社会で主導的だといわれている価値観とは矛盾するような逆説的な事態が生 国民性をめぐる議論

起こるかは社会によって異なる [Lancy et. al. (eds.) 2010]。冒頭で見た「本当の私」についての問いは、 は子どもと大人を分ける分水嶺となっている。若者たちがこうした問いに悩むのは、高等教育や職業をめぐる選択が、どうや って生活を可能にする収入を得るかということだけではなく、社会に対してどうやって主体的にかかわっていくのかについて どんな社会でも、子どもはある時期からその一員として貢献を期待されるようになる。しかし、それがいつどんなかたちで

の決断をせまるからだろう。

私たちは、侮蔑的な発言によってみずからが傷つくことをつうじて、そうした発言が誰かを傷つけることを理解できる。この るのは、その行為が相手に引き起こすのと同じ反応をみずからにも引き起こすからである [ホネット 二〇〇三]。たとえば の議論は、間主観性と密接にかかわっている。アクセル・ホネットによれば、私たちがある行為の間主観的な意味を理解でき ような、主体が こうした子どもの社会に対する貢献と子どもの主体性についての問いを統合するようなアプローチからの議論を示そう。こ A |をとおして | B |を認識するという間主観的な関係を「承認」という。

者(たとえば母親)からその周囲の人びと、最終的にはその社会全体へと相互行為のパートナーの範囲を広げながら、その規 式はそれを求める欲求と対応しながら段階的に変化していく。すなわち、 承認の原初的な形態は、赤ちゃんと養育者との間主観性を基盤とした相互行為に見いだすことができる。その後、 私たちは社会化していくなかで、もっとも身近な他

いることに気づく、つまり相互承認を達成する。 範的な態度をだんだんと内面化していく。これにより、パートナーを承認するとともに自分がそのパートナーから承認されて

いえそうだ。 た相互行為のパートナー(たとえば、就職することを望んでいる会社や社会全体)から思うように認められないことにあると だと考えられている。この考え方に沿えば、冒頭で紹介した「本当の私」が見つからないという悩みの源は、その段階に応じ たらされる。この議論では、相互承認を達成することは、私たちが働くことをつうじて充実した社会生活を送るために不可欠 いっぽう、そうしたパートナーから適切な承認が得られないと、社会生活の再生産が妨げられて「承認をめぐる闘争」がも

起こしたのである。たとえば、フェミニズムの理論家は、現代社会では富の再分配を求める社会運動とアイデンティティ・ポ リティクスを推し進める社会運動とが分断されつつあると考え、これを問題視した。わかりやすくいえば、どんなに人や社会 から認められても物質的資源がともなわなければ充実した社会生活はもたらされないということだ。こうした批判に対しては 「働くこと」をはじめとした公共的な社会生活を支えるようになっていくしくみは、ホネットが思い描いた以上に複雑かつ多 もっとも、話はこれで終わらなかった。こうした議論はその後、充実した社会生活とは何かをめぐってさらなる論争を巻き 議論はいまだに収束していない [フレイザー&ホネット 二〇一二]。初期の親密な関係がその後の

(高田明「子どもと大人」より)

様なのであろう。

注 アイデンティティ・ポリティクス=ジェンダー、 を代弁し、アイデンティティに関して社会的承認を求める政治活動 人種、 民族、障碍など、特定のアイデンティティに基づく集団の利益

問 1

傍線部①「間主観性のあり方は、子どもの発達にともなって変化していく」とあるが、生まれてから「第二次間主観 獲得までの変化についての説明として最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は 1 。

- ていくに従って言語などの文化的な知識を身につけるようになる。 人間は、誕生直後には生理的な反応が優勢であるため、視線や音楽的な発声を通じて意思疎通するが、自他が分化し
- 2 人間は、生まれたばかりの時には自他が未分化であるが、「間主観性」を獲得することで、自他を明確に区別し、文
- 化的に蓄積された言語などを理解することができるようになる。
- 3 いう文化的な知識を獲得することで他者との関係を築くことが可能になる。 人間は、生後しばらくの間は自他を明確に区別できないため、周囲の他者と関係性を築くことができないが、言語と
- 4 を行うようになり、相手に対する応答や要求ができるようになる。 人間は、 自他の区別が明確でない原初状態を経て、養育者や周囲の人々との関わりを通して、徐々に他者と意思疎通

問 2

れがある」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は②。 傍線部②「こうした文化的な特徴づけの広まりは、もともとは分析概念だった『文化』の切れ味を鈍らせてしまうおそ

- 文化を失わせかねないということ。 マスメディアなどでことさらにおもしろおかしく文化をとりあげることは、本来、社会科学の分析対象である希少な
- いた丁寧な分析ができなくなってしまうということ。 一つ一つの社会の特徴を表面的にとらえ、ステレオタイプ化してとりあげる社会的文脈が増幅し、 経験的事例に基づ
- 3 としての魅力が失われてしまうということ。 ステレオタイプの文化観にそぐわない言動を排除しようとする風潮が高まることで、文化が単純化され、 分析の対象
- ような現状を招いているということ。 文化の一部の特徴を誇張してとらえ、過剰に焦点を当てるような風潮が、 人々の誤った文化観を再生産し、 強化する

問 3

傍線部(3) 「好例」とあるが、その理由として最も適切なものを、 次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は

- とを示しているから。 LAにおいても、 サモアなどの地域においても、それぞれの一般的な文化イメージと相反する側面を内包しているこ
- があることを示しているから。 親子関係においてLAは独立性を重んじつつもサモアなどの地域よりも依存的にふるまうなど、文化面で特有の状況
- 3 地域にも共通する側面を含むことを示しているから。 LAでもサモアなどの地域でも、文化イメージは単一の自己観のみでは形成されておらず、 程度の差はあれ、どこの
- 4 なっていることを示しているから。 LAにおいても、サモアなどの地域においても、それぞれに文化的なジレンマを抱えており、それが未解決の問題と

問 4

傍線部4 「フィールドの知によってそれを乗り越えること」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①~④

中から一つ選べ。解答番号は 4.。

- 潜む矛盾や困難を克服すること。 フィールドワークの学識や技術を高めることを通じ、地域の抱えるジレンマに焦点を当て、個人の生活や文化の中に
- 2 目してその保存を図り、文化の豊かさを守ること。 画一的な文化イメージの枠にそれぞれの文化を押し込もうとするのではなく、それぞれの地域が内包する多様性に着
- (4) 3 作り出すこと。 固定化された文化イメージにとらわれず、そこから外れた経験や逆説的な側面に注目する視点をもったうえで、 既存の文化観を再検討し、対象地域の文化イメージと矛盾する隠れた一面を発見することで、斬新な文化イメージを 事例

に基づき人々の文化的実践に肉薄すること。

問 5 傍線部(5)「『本当の私』についての問いは、私たちの社会では子どもと大人を分ける分水嶺となっている」とあるが、

その理由として最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は [5]。

- 1 らの主体性を放棄して生きるという経験をした者でなければもちえない問いと言えるから。 「本当の私」についての問いは、 他者から与えられた自己像への違和感から生じる疑問であり、 ある程度の期間、 自
- 2 担を通して社会に参加する道を模索し始めたことに由来する悩みの表れであるから。 「本当の私」についての問いは、思考し活動する主体としての自己が明確化したうえで生じるもので、職業や役割分
- 3 「本当の私」についての問いは、どのような職業について自らの生計を立てていくかの決断をせまる問いであり、 扶

養される存在から脱し、社会の一員として自立していかなくてはならない時の訪れを示しているから。

4 る形で自らを際立たせ、社会の役に立ちたいと望むようになったことを意味しているから。 「本当の私」についての問いは、成長に伴い自己と他者との区別が明確化してきたことの表れであり、 周囲とは異な

問 6 空欄 Α В |に入る語句の組合せとして最も適切なものを、 次の①~④の中から一つ選べ。 解答番号は

6

1 А

2

A

社会

В

他者

行為

В 反応

自分

В

А 他者

А 統合

В 自分

4 3

- 7 -

問 7

論じている

本文の論の展開を説明したものとして最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は [7]。

- もの自立過程と関わっており各地域で異なることを具体的な例を挙げて詳細に説明し、最後に日本社会の場合について 「本当の私」についての問いが意味するものを明らかにしたうえで、間主観性の発達についてとりあげ、それが子ど
- ていると論じている。 由を説明し、日本では身近な他者との相互承認を達成しづらいことが自立する時期を遅くし、社会生活の再生産を妨げ 「本当の私」についての問いが青年期に独特であると述べたうえで、子どもの間主観性の発達という観点からその理
- ③ 「本当の私」についての問いと間主観性の発達の関係について論じ、ステレオタイプを克服するという人類学の役割 に触れたうえで、相互承認の概念を紹介しながら現代の社会生活の充実をめぐる議論へ発展させている。
- 違いに言及し、充実した社会生活のためには他者からの承認だけでなく、物質的な豊かさが不可欠であるという論を展 「本当の私」についての問いと間主観性の発達との関連を述べたうえで、子どもの自立を論じる際の問題点や文化の

開している。

(1) えての選択であったとしても。 それを実現するコミュニケーションのパターンに飼い馴らされている。それが飼い馴らされていることを自覚した上での、あ 度は日常生活における「望ましい」感情の状態や対人関係のパターンを規定する。現代人は洗練された「快適さ」の演出と、 なるベクトルの絶妙なバランスの上に成立する。日常の基本的生活技術である感情管理が商業的な場面で利用され、それが今 感情労働によって生み出されるサービスは社会の隅々に行き渡っている。 相手の感情に寄り添うことと巻き込まれないこと、共感的理解と冷静さ。「洗練された」サービスは、異 つかず離れずの距離感、 開放性と親密性、

者や自分自身の感情をある程度操作する必要のある仕事についている」。 感情管理を首尾よく遂行することが職務の一部と化している。「私たちは誰でも部分的にフライトアテンダントであ」り、「他 感情管理の私的利用と商業的利用が入り組み、 循環構造を形成する中で、近年、 典型的な感情労働ではない職種であっても

が売り上げや賃金に直結する点で元来のホックシールドの感情労働概念に包含されるものであるが、②のタイプの感情管理は くとも二つの相の感情管理を行っている。⑴のタイプの感情管理は、「心の状態」それ自体を商品として顧客に提供し、それ (1)顧客や取引先との関係性の中での感情管理と、(2)職場の同僚や上司との関係性における感情管理という少な

元々の感情労働概念に含まれていない

理を遂行することは、 顧客とうまくやれる素養があるのか否かが常に試されている。 のも、こうした理由による。働く人々は日頃の職場での対人関係において顧客や取引先との対人関係を再現することになり として自らを提示できるか否かが業績評価や人間性の評価に関わる事柄となっているためである。日頃の何気ない言動の中で、 |、近年は②のタイプの感情管理も業務を進める上で無視できないものとされている。 顧客や取引先から利益を引き出す際の必要条件となると同時に、上司や同僚に対してもそのような人物 就職活動時にコミュニケーション能力の査定が盛んに行われる В 一、首尾よく感情管

バックヤードでの人間関係のパターンとステージ上での人間関係のパターンの境界線は曖昧になる。

手が顧客や取引先なのか上司や同僚なのかにかかわらず、当該場面の感情規則を瞬時に察知し、どのような感情が求められて そうであるがゆえに、人々は「半沢直樹」のようには振る舞わない。怒りや敵意をむき出しにすることは「洗練された」コミ いるのかを読み取り、 ワイトカラー /ブルーカラーという区分や、正規雇用) 表層演技や深層演技のいずれかを通して「適切な感情」を表示する能力が働く人々に求められている。 /非正規雇用という雇用形態の違いにかかわらず、 С 、相

離れても感情管理を当たり前のように遂行しているためである。 はあるが、ここではよりマクロな、感情をめぐる文化と経済という観点から確認しておきたい。というのも、現代人は職務を だとみなされるに至ったのか。もちろん、職務上それが必要だとか、会社からの命令に従わざるをえないということもあるの それでは、生々しい感情をあからさまには表現しないという感情管理のパターンは、どのようにしてそれが洗練されたもの

じさせた。イルーズは、このようなプロセスを「感情資本主義」とする なメタファーや合理性と結合する時代であった。そして、感情の合理化はその換位命題である、「経済的行為の感情化」も生 フランスの社会学者のE・イルーズによれば、二〇世紀は、「セラピー的言説」のもとに、人々の「感情生活 が経済学的

化のプロデューサーとしても振る舞うことで、「感情的行為」といった心理学的な要素と、 経済的な要素を職場の文化的レパートリーに組み込んだのである。そして、これらの結合は新しい社交性のモデル、とりわけ れば、心理学者たちはまず一九三〇年代にアメリカの企業に大規模に介入し始めた。彼らは心理学の専門家であると同時に文 を唱え、企業内部における合理化の進展は、むしろ「感情生活」の強化と並行して生じていると主張する。その経緯を概観す コミュニケーションのモデルを作り出した。 イルーズは、資本主義経済によって人の感情が抑圧され、社会関係が貧しいものにされてしまうといった常識的な見方に異 マーケットに由来する筋書き--合理性、 心理学者たちは、 生産性、 効率性、 彼らの筋書き-計算可能性が最も重要である--感情のリフレクシブな管理が最も重要である(注1) 利己心、 効率性、 -を結び合わせることに 有効性といった

成功した。感情資本主義社会では、感情に関する言説と経済に関する言説が相互に相互を形づくる.

クが、ポジティブ・トーク、共感、熱意、友好的であること、快活であることを強調してきたし、最近ではスピリチュアリテ ィやセラピー的なものがそこに追加されている。これらのガイドブックは、不安や心配を消し去り、自分自身を成長させるこ この点について、「共感」を例に考えよう。アメリカでは一九三〇年代以来、ほぼすべての成功する経営を説くガイドブッ 自分も他者も受け入れるようなポジティブで前向きな考えを持つことを読者に奨めるものである。

味している 柄や感じ方がその企業の経営基盤に権威をもたらし、生産性にも資すると主張することで新たな経営者の理想像を作り上げた 能力があるに違いない)、心理学者や経営コンサルタントはプロフェッショナルな能力を感情と密接に関連づけ、 つになった。それまでの経営者の権威はトートロジックでそれ以上遡らない類のものであったが(経営者は経営者だから偉く、(注2) 合の感情力とは、 のである。すなわち、 すなわち、熱心で、人柄が良く、フレンドリーであるよう自己をコントロールできることが経営者にとって重要な属性の一 自己の修養であると同時に、他者と程よい距離感を保ちつつの共感と友情、助け合うこと、寛容さなどを意 組織のリーダーの道徳的適合性は、「感情力」の有無や高低によって査定されることになった。この場 経営者の人

が良く、 気持ちに配慮し、その観点から自分のありようを決めていくという「心理学的エートス」は、大多数を男性が占める経営者の

〔注5〕 する「相互行為的――感情的」な言説と、効率性や合理性に関する企業社会の言葉の双方が絡み合うことによって生み出され た新たなスクリプトは、(注3) 感情力を経済活動の中心に置くような、人脈と相互依存のネットワークを生じさせた。職場内の協調性やチームワークを強調 ような感情豊かな人物として自己を呈示するのは、周囲からの信頼と信用を得るためにほかならない。二○世紀の資本主義は 親しみやすく、 他者目線から自分を見ることができ、他者を共感的に理解しようとするといった感情力が重視されるようになる中 伝統的な女性の自己モデルに適応させることを意味していたからである。 他者に対するポジティブな態度と他者を認める器の大きさを備えた人物であること、 職場内のヒエラルキーや権力、古典的なジェンダー観を揺さぶることになった。というのも、(注4) ネガティブな感情をコントロールし、 組織のリーダーがこの

を払われるわけではなくなった。エモーショナルであると同時に合理的でもあるという文化的フレームは、 に係る男女差別や区別はまだまだあるが、組織のリーダーは、ただリーダーであるからとか男性だからという理由だけで敬意 伝統的で権威主義的な男性性とそれによる企業内部における支配のありかたに変化がもたらされていった。 賃金や昇進 企業内の社会的関

係や地位の序列を再編成し、組織や職場の権力を再定義づける。

析した社会学的業績である。こうした先行研究は、 さを払拭しようとする。たとえば、C・W・ミルズの『ホワイトカラー』やW・ホワイトの ものだとみなしてきたという。 実現する手段とみなし、行為者を組織の権威を受動的に受け入れる存在として描き、 よる支配というM・ウェーバのテーゼに触発され、 イルーズは、「感情資本主義」という概念を通して、「感情コントロール」 組織がそこで働く人々の感情にいかなる要求をつきつけるのかについて分 感情管理について合理的な利益追求と職場の社会的コントロールを同 Þ 「合理化」という概念に付きまとうネガティブ 合理化とは「人間的な要素」を抑圧する 『組織の中の人間』は、 官僚制に

感情は予期可能なもの、 会的相互行為の海原へと放出される中、人々は自らの振る舞いや感情を多数の他者に合わせてその都度調整することになり、 ために必須の社会的能力として存在感を増していった。機能分化と相互依存的なネットワークの拡大により、 説明がつかない。N・エリアスが示すように、感情管理は文明化の過程で生じたものであり、 情管理に関する規範が職場に張り巡らされているが、それは企業によって感情がコントロールされるからという理由だけでは しており、 しかしながらイルーズによれば、 感情管理は自制や冷静沈着、 自制されたものへと成型されていく。 D 道徳的自律の隠喩であり、 |。資本主義が勃興するよりもずっと以前に感情管理は私たちの道徳の中に存在 適切に訓練された人格を示唆するものであった。 相互行為の連鎖をうまくさばく 自己は無数の社

ードを変質させた。 女性的観点の排除ではなく包摂、 職場内で奨励されているセラピー的な自己コントロールは、 それは伝統的な組織の社会学的研究が一枚岩的に想定していたような、 これらによって特徴づけられる。 合理性と感情の並存、 新しい形式の感情管理は 感情を自己の中心に位置づけるこ 企業による感情の抑圧とは異なる 組織内の コント i のモ

- (注1) リフレクシブ=自己の考えや行動を深く省みることを通じた。内省的な。
- (注2) トートロジック=同義反復的な。
- (注3) スクリプト=ここでは、台本、脚本といった意味。
- (注4) ヒエラルキー=階層構造。
- (注5) エートス=ここでは、慣習、習性といった意味。

問 1 傍線部(1)「感情管理の私的利用と商業的利用が入り組み、 循環構造を形成する」とあるが、その説明として最も適切な

ものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は图。

- 1 人々の感情表現を自然ではないものへと変化させていくということ。 私的な感情管理を商業的な場面で利用するうちに、逆に商業的な感情管理が私的な感情表現をも規定するようになり、
- 2 面での感情管理が調和した対人関係のモデルを作り上げるということ。 感情管理の私的利用と商業的利用が相互に影響しあうことで、親密さなどの私的な快適さと冷静さなどの商業的な場
- 3 人々を商業的な価値観に飼い馴らしてしまうということ。 私的な感情管理が商業的な場面で利用されることによって、洗練された感情労働のサービスが社会の隅々に行き渡り、
- (4) その相互作用が対人関係の規範を生み出すということ。 日常生活での感情管理が商業的な場面で利用される一方で、商業的な場面での感情管理が私的な感情表現にも影響し、

9

1 Α だが

А それゆえに

2

3

しかし

В

というのも

В

В つまり

にもかかわらず

С そのうえ

С

С

さらに

また

В すなわち

4

А Α

そのため

問 3

С あるいは

1 資本主義経済によって労働者の社会関係が乏しくなることを危惧した心理学者たちが、 利益の追求よりも人間関係の

の経緯の説明として最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は [10]。

傍線部②「感情管理のパターンは、どのようにしてそれが洗練されたものだとみなされるに至ったのか」とあるが、こ

構築が重要であることを説き、職場での新しい社交性のモデルを広めていった。

2 企業による感情管理の方法を考え出し、ガイドブックなどを通じて企業に推奨していった。 企業経営の合理化に協力した心理学者たちが、労働者の感情を企業が管理することで効率や生産性を高めるような、

3 的にも成功している事例を示しながら職場の人間関係の新たな規範を作り出していった。 資本主義経済は感情生活を抑圧するという常識的な見解を覆すために、心理学者たちが、感情管理に優れた人が経済

4 企業経営をめぐる議論に心理学者たちが関わるようになり、感情管理が経営基盤の権威づけや生産性に寄与すること

などを説きながら、職場での新しいコミュニケーションのあり方を提示していった。

傍線部(3)「企業内の社会的関係や地位の序列を再編成し、 組織や職場の権力を再定義づける」とあるが、その説明とし

て最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は [1]

- 1 士の人間関係を重視する企業経営のあり方へと変わったということ。 感情力を経済活動の中心に置く考え方のもとで、生産性や合理性、 効率性を重視する企業経営のあり方から、 社員同
- 2 ・クで結ばれた社員の平等な横のつながりが力を持つようになったということ。 企業経営において感情力が重視されるようになったことで権威主義的な支配関係が覆され、 上下関係よりもチームワ
- 3 的で男性中心主義的な気風や権力関係を見直すことにつながったということ。 他者の気持ちに配慮し自分の感情を制御する能力が経営者たちに求められるようになったことが、企業内の権威主義
- (4) 正する動きが生じ、企業内における女性の地位が向上したということ。 経済活動において伝統的な女性の自己モデルが評価されるようになったことで、完全にではないにせよ男女差別を是

問 5 適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は[12]。 傍線部4「『感情コントロール』や『合理化』という概念につきまとうネガティブさ」とあるが、その説明として最も

経済活動において感情をコントロールすることで労働者は本来の自分の感情を見失いがちになるということ。

- 2 経済活動において感情をコントロールすることで職場の人間関係は冷たく表面的なものになりがちだということ。
- 職場での感情コントロールは労働者の本来の職務の範囲を超えており、それを組織が要求するのは不当だということ。

3

1

問 6 空欄 D に入る文として適切なものを①~④の中から一つ選べ。解答番号は[3]。

- ① 「感情資本主義」はむしろ「感情の商品化」を防止する安全装置として働く
- 2 感情管理は 「感情の商品化」の結果ではなく、社会的能力の本質的要素である
- ③ 資本主義が興るまでは、感情管理は「感情の商品化」などではなかった
- (4) 機能分化が進み相互行為の網目となった現代社会において、「感情の商品化」は必要悪である

問 7 本文の論の展開を説明したものとして最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は [4]

- 1 に分業化が進んだ文明社会における感情管理の重要性を論じている。 過程で「合理化」などの概念のネガティブさを払拭するために心理学者たちが果たした役割を明らかにし、 最初に現代人の感情生活が商業的な感情管理のパターンと結びついた状況を説明し、 次に「感情資本主義」 最後に高度
- 2 明らかにし、 の行動や感情を調整する必須の社会的能力となってきたことを論じている。 最初に感情労働の範囲が広がっている現状を説明し、次に感情をめぐる文化と資本主義がいかに結びついてきたかを 最後に社会形成のための基本的能力である感情管理が、文明の発展とともに、 相互行為の連鎖の中で自己
- (3) 反動から「感情資本主義」が広まっていった過程を明らかにし、最後に社会形成の基本的能力である感情管理が文明化 の進展にともない存在感を増してきたことを論じている。 最初に現代社会の感情労働の状況について説明し、次に資本主義経済によって人々の感情生活が抑圧されたことへの
- 4 体のセラピー的なものへと変容しつつある昨今の状況を論じている。 めぐる文化と資本主義の結びつきから生み出されてきたことを明らかにし、 最初に感情管理の私的利用と商業的利用が相関関係にある社会状況を説明し、 最後に感情管理が社会的なものから個人主 次に現在の感情管理のあり方が感情を

なるのは何かを考えたり知るときではなくて、その知識を主張「する」とき、知識に立脚して行動「する」ときであるのは自 て知ることだったが、自由は知ることではなくて「する」ことに関わる属性だからである。現にいつの世にも、 長い知識の歴史のなかで、哲学にとって自由とはつねに難しい問題であった。ギリシャ以来、哲学の本務は知ることについ 自由が問題に

明だろう

から、知にとっては世界内の他の現象と同じく与えられる対象となる。しかも伝統的な哲学においては対象は意識の客体と見 たと考えられる。本来、哲学が知ることについて知ろうと努めていたとき、知ることはただみずからを拡張し、既成の知を新 なされ、 しい知で置き換えるだけですんでいた。だが「する」ことは知の外部にある営みであり、営みの主体も過程も異質なのである ら遠い場所に置かれることになった。 問題が芽生えたのはしたがって、自由とは何かというかたちで、哲学が知ることを「する」ことに及ぼそうとしたときだっ 知の向かい側に立つものとされてきたから、この認識の図式のおかげもあって、「する」ことはますます知ることか

動の評価は が先にあって、これが行動を一方的に始動させ誘導するのであった。さらに知は行動が終わった後にふたたび働き、個別の行 支配下に置こうとした。この哲学の典型的な仮説が自由意志の図式であって、それによれば未来の予見と選択という知の営み こうしてまず哲学は一方的に行動を対象として見下し、その構造と経過を捉えるばかりか、さらに進んで行動を知ることの А |、行動とは何かという反省もするのであって、これが従来の哲学の行動論であった。

座にあった一元論的二項対立が随所で綻びを露呈し、 は行動の一部分だというような見方は、少なくとも十九世紀末まで夢想だにされなかった。だが二十一世紀の今日、 いうような考え方は、長らくまったく顧みられなかった。まして行動それ自体がそのまま知る働きでもあり、 いかえれば哲学にとって、認識は行動の前にあるか後にあるかのいずれかであって、 С |自由意志の存在が強く疑われているいま、この古い認識論が 知が行動と同時にその内部にあると В 哲学の王

有効でないのはほぼ明白である。

現象であった。そのうえ、そもそも純粋持続は時間の前後関係を許さない現象なのだから、これを認識する主体もみずから純 がら学習していたのであった。またベルクソンの自由は意志の選択とは正反対に、 粋持続と化し、発動と同時に内部からこれを知るほかはないはずである。 れ自体「自生的秩序」と化した身体であった。この身体はそのまま認識の主体として働き、たとえば自転車の乗り方を乗りな 知論であり、 現に、認識と行動の新しい関係を示唆する考察はすでに哲学界にも少なからず現れている。典型的なのがポランニーの暗黙 それに先立つベルクソンの自由論であった。 暗黙知の主体は理性でも意識でもなく、 危機に臨んで純粋持続が自生的に発動する 訓練され習慣づけられ

とだろうが、いずれも目や耳が思わずしてしまう反応であって、ここには能動性と受動性の前後関係はまったくない。 らし耳を澄ますのは のあいだに主導権の前後関係もない。たとえば身体が「もの思う」ということは現象に目を凝らすことであり、 された能動性」というべきもののほかにはない。 えようと努めてきた。もちろん身体の営みに対応して現象が顕れるわけだが、この現象と身体とは主客の関係にはなく、 そして本稿では長い考察を一貫して、認識の主体を身体そのものと見なすとともに、 何かが見えたり聞こえたりしたからであり、その逆もまた真であって、 認識の主体と客体の二項対立も乗り越 認められるのはいわば 耳を澄ますこ 誘 目を凝

界全体のなかでも見られる事態であった。ここでは考える主体は仮に「エス」と呼ばれたが、いみじくも「エス」とは主格の だにも主導権の前後関係はなく、どちらがより能動的か、 人称性をほとんど持たない主語であった。その頭上に現象は電光のように「ひらめく」のだったが、これと「エス」とのあい そしてこの現象と身体の相促関係は、たんに個人の思索の範囲内だけではなく、歴史を縦軸とし共同体を横軸とする知識 誰にも判断できない両者の遭遇が起こるのであった。

由を妨げるといった恐れを根こそぎ排除してしまう。また「する」ことがそのまま知ることだとすれば、 るまい。 さて哲学の知をこのように解釈しなおしさえすれば、哲学の自由の問題はおのずからすべて解決されるのは、 認識の主体が丸ごとの身体であるということは、 認識の過程でたとえば理性と感覚の対立が起こり、 認識の到達可能 感覚が理性の自 いうまでもあ

界は大きく広がり、 な原理であるリズムを感じとり、リズムとともに生きることによって、その働きを如実に知ることができるはずである。 知は暗黙知や純粋持続を直接に把握する自由を獲得するだろう。そして何よりも哲学はこの世界の根源

けで完結自立させるような現象なのである。 喜び方そのものが身体的であって、人はただ目を凝らし耳を澄ますだけではなく、たとえ僅かでも全身を揺すりながら享受す 思議である。たしかにすべて知ることは喜びを伴うが、リズムを知ることの歓喜は次元を異にしている。リズムの喜びはその るのが普通だろう。哲学にとって、リズムはそれを知ることが最終目的となるような現象であり、裏返せば知ることをそれだ ないという事実である。そしてその第二の特色はそれを感じることが喜びであり、その認識が解放感に直結しているという不 リズムの特性の第一はそれがもっぱら顕現する現象であり、ひたすら感知することはできても、それを造りだすことはでき

ズムを知るということ、いいかえればリズムを体感しながら生きるということは、 しかしリズムは当然ながら、たんに哲学者に認識されるだけでなく、常識社会に暮らす普通の人にも感知される。そしてリ 誰であれ二つの意味で認識者を自由にして

ズムは随時、 は大きい。純粋持続が最初から常識と隔絶し、人に選択を許さない危機のなかでのみ体験できる現象であるのにたいして、 えることができる。機械的必然性からの解放という意味で、これはたぶん純粋持続の直観にも似ているだろうが、両者の違い 人は「チック・チック」という機械的反復音の背後に、「チック・タック」というリズムを感じとっただけで軽い昂揚感を覚 第一にそれはいっさいの機械的な必然性、硬直した規則性から人を解き放ち、閉じられた受動性の檻から救出してくれる。 随所に顕現してくるいわば日常茶飯事だからである。

者であり、 死後に不動の命令となって硬直するものであって、およそ生の柔軟性とは無縁の存在なのであった。 文であって、 第二にリズムは機械的必然性とは逆の、カント的な自由意志の桎梏からも人を解放する。 他者と闘って制約しあう力であるから、そのままではむしろ社会的相互抑圧の原因となる。さればこそ自由を真の 睡眠中にも他事に追われているときにも人を縛りつづける。むしろ意志は行動が挫折したときに強化され、 意志は見えない石碑に彫られ 加えて意志は欲望の代弁

自由の基礎とするには、ポランニーの自生的秩序の形成が必要になるのであった。

heit)」を鋭く感知することだと思われる。 境のなかに暮らすことだろう。季節の変化を繊細に感じとり、年中行事を丹念に営み、日々の日課をも細部まで心してこなす できることはいわば予防的措置であって、日頃からリズムに敏感な生活習慣を身につけ、硬直した自由意志が生まれにくい環 ことである。とりわけ重要なのは、自然現象であれ文化現象であれ、そのなかでみずからが「運ばれていること(Getragen-この自由意志がいったん形成され、生の硬直が発生した後では、もちろんリズムにこれと対抗して勝つ可能性はない。人に

日本人なら俳句や短歌に親しむのも一つの方法だろう。 在を生きていることを実感することである。季節の節目を祝う各種の行事を怠らず、些細な日の光や風の音にも敏感になり、 自然現象についていえば、朝夕の推移、季節の変化を外界の事象として傍観するのではなく、それに運ばれてみずからが現

その過程もリズムの弾みに乗せられて進んだはずであって、必要なのはそれを自覚することだけである。これは常識的には人 が謙虚になるということだが、哲学的にはリズムの顕現が認識されるということにほかならないのである。 成功の産物にすぎなかったことを、人はすなおに認めればよい。現にそれはたまたま始めようという気になったときに始まり、 人が起こす仕事についても同じことであって、たとえどんなに強い意志を抱いて完遂した事業でも、じつはそれは運の良い

(山崎正和『リズムの哲学ノート』より)

注

桎梏=自由を厳しく束縛するもの。

切なものを、次の①~④の中から選べ。解答番号は [15]。

1 伝統的な哲学において、「する」ことは知ることの外部にあるとみなされたうえ、知ることと相反するものとして排

除されたということ。

2 伝統的な哲学において、「する」ことは知ることの外部の営みとして、知ることがみずからを拡張する際ますます周

縁に追いやられたということ。

3 伝統的な哲学において、「する」ことは知の外部に規定され、知ることよりも価値の劣ったものとして探究が疎かに

されたということ。

4

伝統的な哲学において、「する」ことは知ることの外部の営みとみなされたうえ、意識の客体として知の向かい側に

位置づけられたということ。

問 2

空欄

Α

С

に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は

16 °

А

むしろ С なかんずく

В

В まして С さりとて

В むしろ С さりとて

С なかんずく

4

Α Α Α

さておき さておき もとより もとより

В

まして

3 2 1

次の①~④の中から一つ選べ。

番号は 17。

- ① 自由意志の選択により、現象が発動し、その後身体が動くような関係
- 2 身体を動かすことで現象が知覚され、その知覚によって身体がより主体的に新しい動きをする関係
- 3 身体の動きと現象の顕れとが、能動と受動の関係や主客の区別なく生起するような関係
- 4 現象の顕れに対応した身体の動きや、身体の反応による現象の生起が二項対立的に引き起こされる関係
- 問 4 傍線部③「生の硬直」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は
- 1 自分の欲望のままの生き方によって他者との闘争が増え、自己中心的な行動が常態化してしまうということ。

2

3 自らの意志があるようでも、欲望に従ってしまうことで、機械的で単調な人生を送ることになるということ。

自由意志や欲望によって、自らの生き方が縛られ、また他者と制約しあうために柔軟性が失われてしまうということ。

4 挫折や死を克服するため欲望が肥大化し、寝ても覚めても自分の生き方について考えてしまうということ。

解答番号は 19

- よかったからもたらされた偶然の産物であると考えること。 たとえ自分の意志の力で大きな仕事を成し遂げたとしても、 決して誇らずに謙虚な姿勢を大切にし、 それが単に運が
- 2 で大きな仕事を成し遂げることができると発見すること。 普段の生活を細部まで丁寧にこなしていくことでリズムを感じることができ、そのリズムに合わせて仕事をすること
- 3 為は根底においてつながりがあると理解できること。 自然の移り変わりを意識的に感じとると、自分が起こした仕事が偶然性に支配されていると気づき、 自然と文化の営
- (4) の流れの中で身を委ね仕事をしていたことを自覚すること。 自分が成し遂げたことを意志の力の産物だとは考えず、日常生活の中に立ち現れてくるリズムを感じとりながら一定

問 6 本文の論の展開を説明したものとして最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は 20

- 体〉の関係を提示し、最後に世界の根源的な原理であるリズムを感じるための方策について述べている はじめに哲学において自由を論じる難しさを確認し、続いて自由について考えるために現象 〈=客体〉と身体〈=主
- 2 を提示し、最後にリズムを通して自由が獲得できるという最も新しい説について述べている。 はじめに伝統的な自由の定義について説明し、続いて二十一世紀に入り身体を重視する主張が主流となってきたこと
- 3 ば自由の問題を解消できると説き、最後にリズムや意志と生の柔軟性との関係について述べている。 はじめに自由は伝統的な哲学の知では捉えられないことを説明し、続いて認識の主体が身体そのものであると考えれ
- 4 に自然界のリズムを感じとり、 はじめに伝統的な哲学と自由意志との関係について説明し、 自由を奪う意志にとらわれた生き方から脱却するのがよいと述べている。 続いて自由を獲得するために有効な考え方を説き、

問 7

本文の内容と合致するものとして最も適切なものを、次の①~④の中から一つ選べ。解答番号は[2]。

- され、現在ではリズムとともに生きることが新しい問題として浮上している。 哲学において自由とはつねに難しい問題であったが、認識の主体と客体の二項対立を乗り越える考え方によって解決
- 2 前後のいずれかにあり、知ることと「する」ことは、つねにつながっていると十九世紀には考えられていた。 伝統的な哲学においては既成の知を新しい知に置き換えることで「する」ことについて論じてきたが、認識は行動の
- 3 に親しむことが大切だと考えられてきたが、強い意志の形成もまた一方で必要である。 自由の問題を解決するには自然現象であれ文化現象であれ「運ばれてくること」を感知し、たとえば短歌や俳句など
- 4 て哲学者だけでなく誰もが自由になることができる。 現象の中で身体を通してリズムを感じながら生きることは気分の昂揚と自由意志からの解放をもたらし、それによっ

は 22 23 、 24 、 25 。

問 1
商店街のシン興を図る

1 意味シン長なもの言い

3

着シンメールを開く

問 2

手紙の冒頭に「拝ケイ」と記す

2 風邪で食欲不シンになる

(解答番号は 22)

4 上司にシン言する

リョウ 袖として組織を率いる

3 1

論語にケイ発される

ケイ観を損ねる

問 3

本リョウを発揮する

4 2 失ケイな態度をとる 京都の寺社に参ケイする

3 1 作業を完リョウする

2 差は一目リョウ然だ 閣リョウが一新される

4

解答番号は 24

(解答番号は 25

水がギョウ固する 国際法に通ギョウする

2

ギョウ儀のよい子ども

問 4

3 1 急な知らせにギョウ天する

4 一点をギョウ視する

(解答番号は 23

5
次の各問いの傍線部の読みとして正しいものを、
それぞれ①~④の中から一つずつ選べ。
解答番号は 26、
27

L
,
į
(
(
(
(
,
,

問 1	
彼は世知に長けた人物だ	
(解答番号は 26)	

問 3 問 2 1 1 姉の繰り言に付き合う あやつ よち ② 〈 ② よ じ 3 3 あざけ せち 4 4 かた せじ (解答番号は 27)

 うんてん
 こうてん 曇天の日が続く 3 どんてん ④ らんてん

① 尚 ② 招 ③ 証 ④ 渉	問2 時期 □ 早	① 肝 ② 貫 ③ 冠 ④ 敢	問1 勇猛果
	(解答番号は 30)		(解答番号は 29)